

優秀賞

## 私が見たスラム街

宮崎県 宮崎第一高等学校一年 新納 愛菜

英語が好きな私は、以前から英語をツールとして様々な人と交流し、世界の現状をこの目で見て五感で体験してみたい、そう思っていた。そんな折、学校でフィリピンを訪れる研修の機会を与えられることとなった。他国を訪れ、そこで暮らす人と交流してみたいという自分の願いが叶えられると思い、心が躍った。私は、このフィリピン研修でのちに悲壮感と感動を味わうことになる。

向かった先はフィリピンの首都マニラ。都市部マニラにありながら貧困層が居住するスラム街と呼ばれる地区を訪ねることになった。目的地であるスラム街へと近づくと、鼻をつくような嫌な臭いが漂ってきた。臭いの正体は大量のごみ。乗車しているジップニーからふと空を見上げると、あちらこちらに高層ビルの上階部が見えた。ほどなくして、目の前には過密化したスラム街が広がった。板を何枚も組み合わせで作ったような家、骨のラインがはっきり見える痩せ細った犬や猫、大量の洗濯物、そこら中に落ちているごみ、そのごみを漁る人、

所々陥没している道路、濁って汚れた川。初めて見る光景だった。テレビやSNSでしか見たことがない映像がそこにあっただ。そこで見たものは、物質的にはとても貧しい現実だった。学校の事前研修である程度の知識を入れてはいたものの、私は目の前の光景に呆然とするしかなかった。どのようにして毎日をここで生きていくのだろうか。果たしてお金は足りているのだろうか。様々な疑問と不安が脳裏に浮かんだ。フィリピン人の大半はキリスト教のカトリックを信仰している。その神父さんとシスターと呼ばれる女性修道士の案内で、スラム街の中へと入った。

初めに出会ったのは、元気に遊ぶ子供達。人懐こくて、見ず知らずの日本人に対してどんどん話しかけてくる。一緒に踊ろう、一緒に遊ぼうとせがまれた。ここには、学校に行けない子供達もいるし、スモークーマウンテンというごみの山に住み、ごみを拾ってお金にしている家庭の子もいる。不安を抱えてスラム街に入った私であったが、その輝くような笑顔に逆に元気をもらった。

次に出会ったのは、ある家族のお母さん。

「What is your dream?」

と尋ねてみた。大きな家が欲しいだろうか。それとも美味しいご飯を毎日食べたいだろうか。あるいはお金が欲しいだろうか。全く違った。意外にもその夢は日本では簡単に実現できるものであった。

「My dream is my daughters and sons finished their study and get a job」

子供たちが無事に勉学を終えて、普通の仕事ができることなのだと言う。他の家のお母さん達にも同様の質問を試してみたところ、皆、口をそろえて同じように答えた。私から見れば苦しくてつらい生活にしか見えないのに、彼らはそこの生活に満足していると話し、裕福な暮らしを求めているなかった。ただ、家族のことを切に願い、一番の宝物は家族、家族の幸せだけを望む母親の姿に涙があふれた。人の幸せは物質的な豊かさではないのだと強く感じる出来事であった。

続いて案内されたのは『死を待つ人の家』。ここは路上生活者を保護しお世話をしたり、この場所で最期を迎えたいと願う人が希望して集まったりする施設である。「天国に行く準備はできた?」とシスターが尋ねると、希望に満ちた顔で「はい」と応える人々。人間の生き方を考えた。まだ言葉にはならないが、何気ない日常の中で生きる喜びを味わえるようになった。



最後に訪問したのは、スラム街にある高校。大半はスラム街の貧しい家庭に暮らす生徒達。ここでも高校生たちは、はじけるような笑顔で接してくれた。ここでは、お互いの学校の紹介をしたり、出し物を披露しあったり、一緒に語り合った。楽しかった。自分の思いをストリートに伝える高校生。貧しい暮らしに嘆き悲しむ子は一人もおらず、純粹で前向きな高校生達ばかりであった。

私がスラム街で見たものは物質的にとても貧しい環境ばかりであったが、しかし、私がスラム街で感じたのは、人のあたたかさや愛情であった。「感動すると人は涙が出る」とある人が言った。その通りである。スラム街の人に出会い、かつてない様々な経験をする中で、私はたくさんの涙を流した。日本では味わったことのない感動を覚え、帰国してからも生きる意味や価値を考え続けている。